「ペレストロイカとは何か・シェワルナゼ回顧録を中心に」

時事総合研究所　　中　澤　孝　之

◎はじめに

ペレストロイカとは何か。１９８５年3月にゴルバチョフ政権が誕生し、翌８６年の第２７回ソ連共産党大会直後からいわゆる「世直し」としてのペレストロイカが、ゴルバチョフ書記長（当時）の大号令のもと全国的なキャンペーンとともに始まった。「ペレストロイカは革命である」というゴルバチョフ書記長の言葉から、ペレストロイカは「ゴルバチョフ革命」、あるいはレーニンの革命に次ぐ「第２の革命」と呼ばれた。ペレストロイカがゴルバチョフ政権の中心的なスローガンになった。

ペレストロイカが始まって既に５年以上もたっているので、今さら改めてペレストロイカを論じるほどのことはあるまいとの意見があるかもしれない。が、「ペレストロイカは死んだ」あるいは「ペレストロイカは失敗した」とも言われ、「ポスト・ペレストロイカ」が論議されるようになった今、改めてペレストロイカの本質を再検討してみるのも、決して無意味ではない。たまたま、ペレストロイカを考え直すきっかけを作ってくれた一冊の本が最近出版された。シェワルナゼ元ソ連外相の回顧録「未来は自由に属する」（邦題「希望」・朝日新聞社刊）である。

シェワルナゼ氏の回顧録は２つの点でわれわれの関心を引き付ける。一つは、今まで不透明であった、同氏が外相を辞任した理由、およびわざわざ同書に追加されたクーデター事件にまつわる同氏のゴルバチョフ批判のくだりである。もう一つは、同書全体を貫くペレストロイカ、新思考に関する同氏の考え方、新思考外交の足跡である。同書を読んだ専門家の中には、内容があまりにきれいごと過ぎて、「格好いいことばかり」とけなす向きもあるようだが、仮にゴーストライターが書いたにしても、内容は終始一貫しており、また、自らの非を認めるくだりもあるので、やみくもに酷評するのは公平を欠くように思われる。シェワルナゼ氏の「改革への真剣さ」を疑う理由はない。むしろ、ペレストロイカとは何か、さらに新思考外交とは何かを改めて考えるには、同書は第一級の資料と言うべきであろう。

そこでシェワルナゼ回顧録を基にペレストロイカとは何であるかを検討するが、順序としては、「シェワルナゼ氏の外相辞任の理由」と「ペレストロイカと新思考外交」に分けて論じてみる。

１）シェワルナゼ氏の外相辞任の理由

シェワルナゼ氏は周知のように、９０年１２月２０日、ソ連人民代議員大会で突然、辞意を表明して国際的に大きな波紋を投げかけた。その演説はシェワルナゼ氏らしからぬ大仰なジェスチャーまじりの激高した調子だった。ソ連の新聞「独立新聞」は、この「事件」を９０年のソ連最大の政治的事件であると評した。

「独裁が近づいている。民主派の諸君、君らは四散し、逃げ隠れしている。この辞任を独裁の到来に対する私の抗議とさせいほしい」ーシェワルナゼ氏はこのように「独裁の到来」に警告を発した。「独裁」とは具体的に何を指すのか。当時は詳らかでなかった。一部には「ゴルバチョフ独裁」への警告だとする論評も見受けられた。しかし実際は、保守派、軍産複合体の台頭への警告であったことが、回顧録で明確にされている。

ｉ）軍部・軍産複合体との対立

当時、シェワルナゼ外相は人民代議員大会へ送付した文書で「外交分野での外交官と軍人の対立に終止符を打つべきである」と指摘して、在任中に軍部との衝突があったことを示唆していた。辞任演説の中でも「個人的な侮辱と人身攻撃があり、深く苦悩した」と述べた。軍縮での譲歩、東独の

放棄、湾岸戦争をめぐる対立など、「シェワルナゼ外交は孤立」（女性外交評論家で、「ノーボエ・ブレーミャ」誌政治評論員ガリーナ・シドロワ女史）の様相を強めていたのである。

シェワルナゼ氏は書いている。「９０年９月から１２月にかけて、これ以上外相を続けるのが空しく、無価値であると思えるような動きがさらに際立ってきた。われわれの目の前で、新思考政策のスタミナが力尽きようとしていた」と。外相の知らないところで、重要な決定が行われたこともあった。欧州通常戦力条約の調印後に、ウラル以東へ兵器の一部（数千両の戦車）を移動した事実を外国の報道で初めて知ったことをシェワルナゼ氏は告白している。この移動は国防省と軍参謀本部が条約を擦り抜けようとしてやったことであった。「陰の権力」が失地を回復しつつあったと同氏は言う。結局、民主勢力が団結して撃退する機会は既に失われたと判断、シェワルナゼ外相は辞任発表の道を選んだのだった。

ii）民主派覚せい・結束呼びかけ

シェワルナゼ氏が辞任を決意した理由の一つとして前記シドロワ女史は「外交を保守派の手に渡すことを避けるとともに、路線論争に終始する眠れる民主派を覚せいさせるための唯一の策だった」と分析した。改革派はまとまりが悪かったから、この分析は的を得たものであった。

「私は、この時代の逆流をかなり前から予感し、気のおけない仲間にはそのことを率直に話していた。しかし、原則論で一致していても、人は必ずしも同じように行動してくれるとは限らない。結局私には外相辞任という選択以外に、道は残されていなかった」とシェワルナゼ氏は書いている。ゴルバチョフ大統領を置き去りにして、有力者が一人、一人と大統領から離れた。経済学者のシャタリン、ペトラコフ氏らである。それにシェワルナゼ氏が加わったのであった。その後91年８月クーデターの直前ヤコブレフ大統領首席顧問が戦列離脱を決意し、離党するとともに、大統領首席顧問のポストから去った。

結果的には、シェワルナゼ氏の改革派結束呼びかけの目的は達せられなかった。改革派の乱れに乗じて政権内の保守的権力者たちが決起した８月クーデターそのものがこれを証明している。

iii）グルジア的要因

９０年１２月２８日付けの「独立新聞」は、シェワルナゼ氏の外相辞任にはグルジア要因があると指摘した。最終的な辞任理由のうち、このグルジア的な要因について回顧録は触れていない。ただ、１９５６年３月のグルジア青年の暴動に対する戦車での鎮圧を想起させた８９年４月のトビリシ事件に関連して同年末の第２回ソ連人民代議員大会で、つまり実際に辞任した１年前に、シェワルナゼ氏は一度辞職を決意していることが明らかにされている。軍の発砲で市民２０人が殺されたトビリシ事件の責任がうやむやにされたからであった。「議場を退出するとき、私はその日のうちに辞表を提出しようと、声明文を用意した。“独裁”については一言も触れていなかったが、切迫した私の気持ちと抗議は込めた」という。だが、ゴルバチョフ氏が自分の言うことを聞いてくれたと思って、同氏の説得に応じて外相のポストにとどまった。

その後も、日一日と決意を迫られる状態が続く。「独裁の危機」が近づいていたとシェワルナゼ氏は感じた。「無権力状態、無政府主義、混とん、そして、内面から合法権力を覆して、その権力を意のままに行動させるか、あるいは、全く権力を後退させるか、というような思考方法」ーこれが独裁を生む土壌であるとシェワルナゼ氏は力説している。

シェワルナゼ氏はグルジア共和国の内相、党第１書記を歴任した。１９８５年７月、ゴルバチョフ書記長（当時）に請われて連邦外相に就任した。６月のある日、ゴルバチョフ書記長からの電話を受けたとき、「外国語は全くしゃべれず、母語のグルジア語となまりの消えないロシア語が使えるだけ」のシェワルナゼ氏にとって、書記長の提案は「生涯最大の驚きであった」。「歴史的に見てもこの職はロシア人かロシアの文化で育ち、先祖にロシア人がいる人間に当てられた」からである。

しかし、彼は「この挑戦」を重大な決意で引き受けた。「何よりも重要だったのは、これがゴルバチョフの選択だったことだ。つまり、同志が私を選択したのである」とシェワルナゼ氏は強調している。

ついでながら、クーデターの首謀者８人組がゴルバチョフ大統領の子飼いであるところから、彼の人事政策に対する批判が噴出した。しかし、よく考えると、シェワルナゼ、ヤコブレフ、ペトラコフやシャタリン（二人は急進改革派経済学者）、あるいはシャフナザーロフ（政治担当の大統領補佐官）、イグナチェンコ（前大統領報道官）氏ら有能な改革派の人びとを登用・重用したのは、ほかならぬゴルバチョフ書記長自身でなかったか。ペレストロイカの共同責任者としてシェワルナゼ氏をグルジアから招いたのは、地方行政のらつ腕ぶりを評価したゴルバチョフ書記長その人であった。この素人外相の起用はずばり成功したと言っても異論はなかろう。ゴルバチョフ大統領は人を見る目があったということではないか。

さらに言えば、従来の書記長の独裁的な権力をもってすれば妨害できたはずのエリツィン氏のカムバックを許容したのも、ゴルバチョフ大統領（あるいは同大統領の始めたペレストロイカ）であったと言うことができる。この点を無視した議論が多い。ゴルバチョフ大統領の人事政策は全然間違いであったというのは言い過ぎである。

ところで、故郷のグルジアでは９０年、シェワルナゼ氏のコントロールの利かない事態が進展していた。３月の国民投票で９９％の高率の国民の民意を得てグルジアは４月９日に独立を宣言した。４月１４日に大統領制導入を決め、ガムサフルジア最高会議議長を初代大統領に選出。１１月の最高会議選挙で、ガムサフルジア大統領は「円卓会議・自由グルジア」を率いて共産党に圧勝した。以後、グルジアからは社会主義の跡形が瞬く間になくなった。レーニン銅像は撤去され、社会主義のスローガンは街角から消えた。なお、９１年５月２６日初の大統領直接選挙で、ガムサフルジア氏は８６％の得票で大統領に当選を果たしている。

このガムサフルジア大統領は、シェワルナゼ氏が共和国の実権を握っているときに数回投獄された苦い経験をもつ反体制活動家であった。そのシェワルナゼ氏批判がことさら厳しいのにはこうした理由がある。７６年にはヘルシンキ・グループのグルジア支部を創設している。大統領の職務に就いてからは、一切の妥協を排する素人政治家との評判もあり、音楽教師であったリトアニアの政治家ランズベルギス最高会議議長としばしば対比される。かつてのグルジア出身の独裁者スターリンのように、今や「グルジアの独裁者」と言われる。グルジアでのシェワルナゼ氏の評判はあまり芳しくないと伝えられる。「シェワルナゼは世界のためには多くのことをしたが、グルジアのためには何もしていない」というのが地元のシェワルナゼ評だ。同氏の権力基盤はグルジアにはほとんど残されていないという。それどころか、彼は故郷に戻ることさえ許されていない状況である。

ゴルバチョフ大統領は初代副大統領にシェワルナゼ氏を指名する腹積りであったようだ。大統領自身このことを公言している。新思考外交で見せた同氏の交渉能力をゴルバチョフ大統領は買ったのであった。ところが、その指名直前にシェワルナゼ氏は外相を辞任、いったん政治から身を引いた。副大統領に指名されたら、「グルジア問題」で泥を被らないわけにいかない。シェワルナゼ氏はそれを巧みに避けたのではないか。賢明な同氏は自らの政治生命を危うくするようなポストに就くべきではないと判断したのではないか。当時、中央の言うことを聞かないガムサフルジア大統領統治のグルジアに軍隊を導入し、大統領直轄にすべしという声も政府内部で上がっていた。シェワルナゼ氏はあえて火中のくりを拾うことを忌み嫌ったと推測しても不自然ではない。

iv）ゴルバチョフ氏との対立

外相辞任の４番目の理由としてゴルバチョフ氏との対立を挙げることができる。シェワルナゼ氏は回顧録に次のように書いている。「私は１年以上も前に、ペレストロイカに反対する超保守反動勢力のはっきりした陰謀がありそうだという予測

を彼に伝えていた。また、私は９０年の間中ずっと、公職にある人によって公然と、また、密かに進められている策略について、事実と行動と文書を手掛りに彼に警告し続けた。そのうち何人かは自称“非常事態国家委員会”に登場した。さらに私は個人的手段を尽くした後、独裁が迫っていることを警告するために９０年１２月２０日、人民代議員大会の演壇に登った。私は警告し続けてきたのだが、何も効果はなかった。実際、私は、大統領は耳も目も不自由で、何も聞こえないし、見えないと言うべきだった」と。

９０年１０月１５日、ゴルバチョフ大統領がノーベル平和賞を受賞したと発表されたその日、シェワルナゼ氏は最高会議で保守派院内会派「ソユーズ」の攻撃を懸命に防いでいた。「私が必要とした唯一のこと、つまり、大統領に望みを託したことは、保守派をきっぱりと拒絶し、明確な態度を取ることであった。また、われわれに共通の政策を何の条件も付けずに公然と守ることだった。しかし、期待は無に帰した」という。「独裁の到来」の警告に対してゴルバチョフ大統領は「独裁など全く予想できない」と言って、無視した。こうしたゴルバチョフ大統領の態度に不満があった。

シェワルナゼ氏は辞任の後しばらく、ゴルバチョフ大統領とは一線を画した。不満がくすぶり続けたようであった。辞任した後も自分の警告にゴルバチョフ大統領は耳を貸さなかったことへの不満をシェワルナゼ氏は回顧録の中でぶちまけている。

しかし、同時にシェワルナゼ氏は「私は友人を見捨てたわけではない。辞任することで、彼が目標を取り戻すのを助けたいと思った」と述懐している。が、こうした回顧録の記述とは裏腹に、シェワルナゼ氏のゴルバチョフ大統領批判は日を追って強まり、８月クーデター以前にも、エリツィン大統領と口をそろえて、ゴルバチョフ大統領辞任を公然と要求した。クーデター直後には一時、ゴルバチョフ大統領の「クーデター共謀説」に傾いたこともあった。クーデター反対の意思を明確に示さなかったベススメルトヌイフ外相の後任にゴルバチョフ大統領がパンキン・チェコスロバキア駐在大使を任命した時にもシェワルナゼ氏はクレームをつけた。ゴルバチョフ大統領の主宰する安保会議への不参加を表明し、両者の対立を際立たせた。

クーデター事件に関連してゴルバチョフ大統領の責任追及、とりわけ人事政策への批判は回顧録の追加部分「エピローグ・８月クーデター」に散見される。「彼は自分の周辺や国内で起こっていることに余りにも無知すぎた。私はすべての疑惑を完全にぬぐい去ることができなかった」とシェワルナゼ氏はゴルバチョフ氏を批判する。

さらに、シェワルナゼ氏のゴルバチョフ大統領糾弾は厳しい。「今私はきっぱりと断言できる。非常事態国家委員会を育んできたのは、ほかならぬ、彼自身なのだということを。彼は自分の不注意と決断力のなさ、賛成したり反対したりぐらつく傾向、人を見る目のなさ、本当の同盟者に対する無関心さ、民主勢力に対する不信感、国民という名の要さいを信じないことなどによって、非常事態国家委員会を育んできたのだ。国民の方は、彼が導入したペレストロイカによって変わっていたというのに。ここにゴルバチョフの大きな個人的な悲劇がある。また、彼に対する同情がどんなに大きかろうと、それが危うく国家的な悲劇につながるところだった、と言わざるを得ない」

クーデター事件１カ月後の９月２５日、シェワルナゼ氏はゴルバチョフ大統領直属の政治諮問評議会のメンバーに、ヤコブレフ前大統領首席顧問、ポポフ・モスクワ市長、サプチャク・サンクトペテルブルク市長、改革派経済学者ペトラコフ氏らとともに正式に加わった。クーデター事件の反省からようやく改革派が結集したのである。シェワルナゼ氏は言う。「国の政治に関与しないと言っていた自分が（評議会参加の）ゴルバチョフ大統領案を受け入れたのは、クーデター事件によって民主勢力の統合に努力することを決意したためである」と。民主勢力の団結の乱れがクーデターを誘因したとの認識に基づく賢明な選択であったと言える。

さらに１１月、連邦外務省の改組に伴い、対外

関係省がが新設され、初代大臣にシェワルナゼ氏が任命された（パンキン外相は駐英大使に転出）。言わば、カムバックである。この人事は約１カ月前からのゴルバチョフ、エリツィン両大統領との三者協議の結果決まったといわれる。改革派の有力者３人がスクラムを組んだ形となった。これはクーデター失敗による一部保守派の巻き返しを警戒しての団結と見られる。また、共和国の独立フィーバーの中で連邦解体を避けるための、起死回生のゴルバチョフ人事でもあった。

ついでながら、９１年１１月末現在で、主要な改革派政治家は、シェワルナゼ氏を含めて皆、連邦主義者であると言ってよい。彼らは、連邦解体によって、ユーゴスラビアの例が示すような流血の内戦がもたらされる可能性が大きいので、ぜひ避けねばならないという考えで一致している（ポポフ・モスクワ市長の９１年１０月３日付け「イズベスチヤ」紙論文参照）。

２）ペレストロイカと新思考外交

ペレストロイカを考えるに当たって、回顧録の中で明らかにされた幾つかの点を指摘したい。第１に、ペレストロイカの“共同建築家”はゴルバチョフ、シェワルナゼ両氏であるということが改めて明確にされている。

７９年１２月のソ連のアフガニスタン侵攻に疑問を抱いていることを確認し合った二人が、その後、黒海沿岸のピツンダの公園での「森の中の散歩」で意気投合し、「遠大なる構想」を生んだ。これがペレストロイカのほう芽であった。当時、ゴルバチョフ氏は党中央委政治局員候補兼書記。老人政治（ジェロントクラシー）の中で息をひそめている毎日を過ごしていた。一方、シェワルナゼ氏は政治局員候補に就いてはいたが、まだグルジアのボス（共和国第１書記）だった。二人は「互いに胸の内を明かした仲であった」。

二人は既にコムソモール（共産青年同盟）活動の時代からの知り合いで、「互いに多くの点で同じ考えをもっていることが分ってから、もっと親しくなりたいと願ったのは当然であった。私と同じように彼は農民出身で、小さいころから外へ出て働き、民衆の生活の様子をよく知っていた。彼の教養と博識は申し分なかった」とシェワルナゼ氏は書いている。さらに次の点も重要だ。「彼には私をいつも当惑させるようなコムソモールの人間に付き物の気取った単純さがこれぽっちもなかった。だが一番重要なことは、彼には、お仕着せの枠をはるかに超えて思考をめぐらす特徴がはっきりと見て取れたことだ」

８４年の冬、シェワルナゼ氏はゴルバチョフ氏にこう言った。「すべてが腐り切っている。変革すべきだ」と。ゴルバチョフ氏は党書記長に選出されてわずか３カ月後の８５年６月半ば、じきじきシェワルナゼ氏に外相就任を懇望したのであった。

外相に就任して直後シェワルナゼ氏に外国の諸外相から同情と関心が寄せられたが、それは「私個人に寄せられたというよりも、新しい方向、つまりゴルバチョフの目指す方向に、ペレストロイカの方向に寄せられたのであろう。私はこの方向を国際関係にできるだけ反映させ、適用するように努めた」とシェワルナゼ氏は指摘している。外交は内政の延長といわれる。まさに内政のペレストロイカを外交に反映させたのが新思考外交であった。その意味ではペレストロイカと新思考外交は一つのコインの表と裏である。

第２は、ゴルバチョフ・シェワルナゼ・コンビで行われてきた８５年以降の新思考外交は、従来のソ連外交と全く異質なものであったことである。このことはいくら強調してもし過ぎることはない。

西側の外交評論家は、ソ連外交を論ずる場合、受け入れられる常識的な提案、言動が示されても、裏に何かあるのではないかと常に懐疑の目で見ていた。駆け引きに長けたグロムイコ外交に慣らされていたので、やむを得ない面もあるが、ソ連の新思考外交を意図的に理解しようとしなかった向きが少なくなかったのではないか。ペレストロイカで国内情勢が激変しているのに、外交だけが変わらないはずはない。筆者は一貫して、ゴルバチョフ政権のソ連外交を常に内政との関連で見てきた

が、回顧録を読んで改めてこれは正解であったと思う。

では、どこが従来のソ連外交と違うのか。根本的な哲学の違いである。第２７回党大会の時点で「われわれは外交政策の哲学を形成しなければならなかった。私はほとんど毎日ゴルバチョフと会っていたので、彼の考えがこれまで全く議論されたことのない、そして率直に言って危険な道筋に沿って動いているのが分かった」と。

ゴルバチョフ氏の何が危険であったのか。「従来のドグマの主張者や守護者たち、過去何十年ものさばってきた者たちの観点から」は危険な道筋であり、ゴルバチョフ氏は「何世紀間も真理とされてきたことを否定しようとする人間」だったからだ。そして、シェワルナゼ氏自身も、「この“危険な”道をたどることが、状況打開のために不可欠であると次第に確信を深めていく」のであった。ゴルバチョフ氏の「転換の哲学」にシェワルナゼ氏は共鳴したのである（このゴルバチョフ「転換の哲学」に関しては８６年９月の第１５回学会での筆者の報告を参考にされたい）。

ペレストロイカに沿って、ソ連の新思考外交には新しいガイドライン（行動指針）が決められた。幾つか挙げると、国家間の平和的共存は「階級闘争のある特定の形態」とした従来の定義を捨てたこと。したがって、「敵」のイメージを人びとの心から消し去ることが目標とされたのだ。そこからゴルバチョフ大統領が提案した「欧州共通の家」という構想が出てきたのであった。

また、国家関係にイデオロギーを持ち込まないことも新しいガイドラインであった。つまり、「国家関係は、階級闘争の利益と法則に従属する」という考えを放棄し、「普遍的な人間的諸価値を最優先する」という「国際関係の脱イデオロギー」の原則を外交の根底に据えたのであった。「新思考は、外交の原則と基本は対立や闘いであるとする従来の考えを否定した」のであった。「新思考は人間を通して、人間の利益の点から世界を考えるもの」であって、「人間がすべての基準、つまり人間基準主義である」ともシェワルナゼ氏は言う。

「普遍的な人間的価値の優先を捨てて階級的利益を絶対優位とするならば、国の内外に“敵のイメージ”を復活させることになり、内外で抑圧的手段を取ることが合法であるという主張を正当化することになる。四囲を敵に囲まれているという認識は“要さい国家”の心理を育て、戦争準備への道を選んで対立と紛争への身構えを意味する。さらにそれは、ソ連を消耗させる冷戦と対立と軍備増強への復帰を意味し、“両体制間の闘争”においてどれほどソ連と“連帯”しているかによって外国政権への支援が決められるという対外政策への逆戻りにつながる」ーというシェワルナゼ氏の指摘は教条主義者には受け入れられないかもしれないが、基本的には正しい。同氏はこれを「帝国主義的論理への逆行」として警戒するのである。

さらに、シェワルナゼ氏は「対立的なドクトリンと、主要な外交上の政策決定を行う官僚的命令システムの値段はあまりに高くついた」「新思考の政策を犠牲にすれば、ソ連を最終的に世界文明から切り離し、世界から孤立させることになる」と力説する。こういう認識に立つシェワルナゼ氏から、「ドアをけって出ていく」外交、つまり、グロムイコ外交批判が出てくるのは当然であろう。

第３に、ペレストロイカの受難である。シェワルナゼ氏は「探求心が偉大な思想を育むとき、いつも受難がある」というドイツの思想家の言葉を引用した後、「ペレストロイカを始めた人びとも、信じられないくらいに重い十字架を背負わねばならなかった。（ペレストロイカの道は）予想よりはるかに険しい道であった」と言う。例えば、「普遍的な人間優位の理論」や「国際関係の分野から階級とイデオロギーの除去を主張する理論」が攻撃の対象になった。ペレストロイカと新思考の前に「二つの体制間の対立を現代の主導的な潮流と見る理論」が強力な「神学的な障害」となって立ちはだかった。ペレストロイカは「悪魔の化身」と宣告されたのであった。「階級的価値に対する裏切り」呼ばわりもされた。

とりわけペレストロイカの初期の段階での「変

化への抵抗は強かった」とシェワルナゼ氏は指摘する。権利と自由に関する声明は紙の上だけのもので、実力者の多くは「自分たちの原則を放棄できなかった」。古い論理に固執し、声明とその実行は、全く別であった。国内流刑のサハロフ博士ら良心の囚人にそのまま刑期を務めさせよ、出国不許可の人びとや離散家族の数を増やすままにしておけ、精神科医にこれまで通り精神病棟でいかがわしい仕事をさせよ、作家や芸術家の市民権はく奪、国外追放を継続せよ、という声がまかり通ったのであった。

新思考外交のあらゆる面に国内の批判が起きたが、特に、社会主義圏の崩壊、ドイツ統一問題では厳しい批判にさらされた。「君たちは欧州の地政学的構造を壊滅させた」「君たちは同盟諸国の国土を強奪し、その外側の安全地帯を引き裂いた」「君たちは相手側の軍事・政治ブロックに対抗する勢力の境界線を、わが国の国境に近づけ、重しとなるワルシャワ条約機構を処分した」「君たちはドイツ統一の速度を速めた」といった批判である。「ペレストロイカの過程は中止され、食い止められねばならない一批判のすべてはこの一点に集中していた」のであった。

シェワルナゼ氏の言うように「わが国の批評家の論理に従えば、われわれの義務とは、ペレストロイカに向けられた非難の核心であり、“ペレストロイカさえなければ、社会主義陣営の中にあんなことは起きなかった”という意識であった」から、こうした論理によれば、「ペレストロイカこそあらゆる災いの根源であったかもしれない」のである。

にもかかわらず、シェワルナゼ氏はペレストロイカ、新思考外交を擁護する。これが第4のポイントである。

長い間ソ連で続いた独裁政治による「権力の独占」がもたらした政治文化の未熟さをシェワルナゼ氏は指摘する。また、「ペレストロイカ実践者の経験不足」についても触れている。「これ以上、従来のやり方を続けることはできないという点で一致しながらも、では今後何ができるのか、どうすべきかについてのコンセンサスがなかった」ことを反省している。「われわれはびくともしない過去の虜だ。権力の独裁は、皮肉にも、真実に対する理解を、攻撃や包囲によって示すことしか教えてくれなかった。いずれも組織そのものの破壊の危険をはらんでおり、そもそもペレストロイカが導入されたのは、そのためであった。検閲という制約を取り除いたものの、その代わりに、自由、文化、責任によって培われた自制を取り入れることができなかった。完全に囚われたまま育ったわれわれは、そのような自制をもち得なかった」とも書いている。何という率直な指摘であろうか。

「肝心なところではわれわれは間違っていなかった」とシェワルナゼ氏はペレストロイカの正しさを強調する一方で、「ペレストロイカは必要であったが、その手段、道具、実施の“物差し”に適切な概念や考えが欠けていたために、制約を受けてしまった。それは囚われた者と同じ精神状態だ」とペレストロイカの制約に言及している。

だが、シェワルナゼ氏が言うように「ゴルバチョフと前任者たちとの違いはあまりに大きかった」。深まるばかりのソ連の停滞ぶりに耐えかねていたインテリたちはこれを率先して支持した。ペレストロイカは「中央集権主義を排除し、民主化と再生のための普遍的な概念として理解され、広く支持された」のである。シェワルナゼ氏は「われわれは地球規模での対決政策や国際関係における階級闘争の絶対性を放棄して、ペレストロイカを開始した」のであるとし、「新思考の思想と政策を擁護するのは、すべての国家が共同社会を形作る世界につながるからであり、これがペレストロイカの意味するものである」と強調する。

ペレストロイカには確かに失敗の面（特に経済ペレストロイカ）もあるが、数多くの成功した面も無視できない。「全体主義という砂漠から抜け出す道程は短くない」から、ペレストロイカは「今後何十年も続けていかねばならないものなのかもしれない」。「新思考と同様にペレストロイカは継続的な過程である」というシェワルナゼ氏の主張は理解できるものである。

◎終わりに

シェワルナゼ回顧録で明らかにされているように、新思考外交はソ連外交の大転換をもたらした。その意味は極めて大きい。この大転換は、西側では長い間なかなか理解されなかった。従来のグロムイコ外交との際立った違いを無視した、ゴルバチョフ外交に対する誤った憶測、見当違いの邪推がはびこった。幾つかの検討に値するゴルバチョフ軍縮提案も「言葉だけに過ぎない」と切り捨てられた。「国際関係の脱イデオロギー化」という画期的な大転換も西側の専門家たちの多くは軽視したり、無視したりした。そうした切り捨てや軽視・無視が実は誤った判断であったこと、ゴルバチョフ・シェワルナゼ新思考外交は、グロムイコ外交のような「ダブルスタンダード」を排除した誠意ある真剣なものであったことは、シェワルナゼ回顧録が詳細な具体例を挙げて示している。

とにかく、ゴルバチョフ大統領、シェワルナゼ外相（当時）の粘り強い地道な活動は、結局、タカ派のレーガン米大統領（当時）の考えまでも変えさせ、ブッシュ政権との間でついに冷戦の終結を実現させるという歴史に残る偉業を達成した。ゴルバチョフ新思考外交を積極的に評価したがらない向きも、この点だけは認めないわけにいかないであろう。

この新思考はもちろん、そもそもゴルバチョフ、シェワルナゼ氏二人の共有するものだ。それだけに、ボタンのかけ違いから、両人がいったんは疎遠になったものの、再び共同戦線を組むことになった理由が、十分に納得出来る。８月クーデター後のシェワルナゼ氏のゴルバチョフ・チームへの復帰はそれほど意外ではないというのが筆者の考えである。（注・目まぐるしいソ連情勢の変化も考慮して、学会報告後の新しい動きも本稿に盛り込んだことを最後にお断りしておく）

主な参考文献（内外の日刊紙、週刊紙誌は除く）

（１）シェワルナゼ著「希望」・朝日新聞社外報部訳・朝日新聞社。

（２）シェワルナゼ著「私の選択」（露文）・ノーボスチ通信社。

（３）ゴルバチョフ著「革命ーペレストロイカ」・にんげん社。

（４）ゴルバチョフ著「ペレストロイカ」・田中直毅訳・講談社。

（５）ゴルバチョフ著「世界を震撼させた三日間」・福田素子訳・徳間書店（ノーボスチ通信社出版の原著「８月クーデター」も）。

（６）ゴルバチョフ著「ゴルバチョフ演説・論文集」・（Ⅰ－Ⅳ）国際文化出版社。

（７）ゴルバチョフ著「Ｍ・Ｓ・ゴルバチョフー演説・論文集」・（１－７）（露文）政治文献出版所（モスクワ）。

（８）ゴルバチョフ著「未来への構想」・にんげん社。

（９）ゲルト・ルーゲ著「ゴルバチョフ」・鈴木直・深澤雅子訳・平凡社。

（10）グロムイコ著「グロムイコ回想録」・読売新聞社外報部訳・読売新聞社。

（11）ゲイル・シーヒー著「ゴルバチョフ」・落合信彦訳・飛鳥新社。

（12）「最新ソ連論」・学研「国際関係論シリーズ」。

（13）中澤孝之編「ゴルバチョフはこう語った」・潮出版社。

（14）中澤孝之著「大統領ゴルバチョフ大研究」・新芸術社。

（15）中澤孝之著「新版人間ゴルバチョフ」・時事通信社。

（16）中澤孝之著「変貌するソ連理解のキーワード」山手書房新社。